泊って、それに十一月末の寒夜、霞ケ浦に舟を出して月見に出かけたので、女中達は精狂に思ったのだろう、舟が着なく三味線屋の店先に着くと、便所に向った梯子段の下に女が五、六人いて、

「お二階の南京さんにからかってやりましょう」と、噂しているのを節は聞くのである。

「土浦の川口」で、当時の土浦の川口をしのぶ一節はその書き出しである。

冬とはいふものまだ霜の下りるのも稀な十一月十八日、土浦へ着いたのはその夕方であった。狭苦しい間口でワカサギの串を裂いている爺はあるが、いつもの如く火を煽ってワカサギを焼いて居るものは一人も見えないのが物足らず寂しい川口を一廻りして、舟を泛べるのに便利のよさそうな家をと思って見掛けも見憎くない三階造りの宿屋へ腰を下した。導かれて通ったのは三階ではなくて、風呂と便所との脇を行止まりの曲った中二階のどん底である。なまめいた女が代り代りにぜて来る。風呂から上って窓に吹き込む風に吹かれつつ居ると、ぢき目の先の青ごけの生えた瓦屋根の上からまん丸な月が二三間上った。突じたやうではなくいかにもさえざえとして障りになる雲も手を拡げない。命じておいた船が来たといふ知らせで急いで下て見ると宿の前に繋いである。ともの方には空籠が積んであって予の坐る所には四布蒲団が一枚乗せてある。舟は川口の狭い流をずんずん進んで二丁も出ればもう霞ケ浦の入江なのである。

ここに描かれている川口は、今は市の自動車駐車場になり、向うにはデパートの建物などが林立している。昔の川口通りの民家の軒先で、公魚を焼いていたなつかしい風物詩のような光景は、思い浮べるよすがもない。わずかに昔を語っているのは、大きなしだれ柳の一二本である。川瀬巴水の新版画「土浦の川口」というのを、いつか見たが、今如実に土浦の川口を思い出させるのは、私の最も深い印象に残っているこの版画である。

そして、長塚　節のこの一文も、明治時代の土浦の川口の一端であろう。（48・12・19）

（長塚　節研究家）